

第 I 章 調査の経緯と経過

本書は、奈良県生駒郡斑鳩町史跡法隆寺旧境内の若草伽藍跡において、文化庁が1968年と1969年の両年にわたっておこなった国営発掘調査の成果をまとめたものである。

なお若草伽藍跡については、本調査以降2006年5月に至るまでに、奈良国立文化財研究所（現独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所）、奈良県立橿原考古学研究所、斑鳩町教育委員会が、合計9次におよぶ調査をおこなっている（Fig. 3、Tab. 1）。このうちには、若草伽藍寺域北・西を画する一本柱塀といった重要遺構および彩色壁画の発見を含んでいる。（深澤）

1 調査対象地

法隆寺は斑鳩の北東域、矢田丘陵の南西隅に位置し、法隆寺山内に所在する。斑鳩は、地勢的には矢田丘陵の南麓に位置し、竜田川（西）、富雄川（東）、大和川（南）に挟まれた地域である（Fig. 1）。斑鳩の地域は古代政権によって重要視され、7世紀初頭に矢田丘陵の東南麓に上宮王家によって斑鳩宮が営まれた。そして、寺院としてはまず法隆寺が建立された。次いで中宮寺・法起寺・法輪寺が建立されていった。この地に最初に建立された法隆寺の創建年代に関して明確に記す史料はみられないが、この寺は『日本書紀』をはじめとする史料に天智天皇九年(670)に焼亡したことがみえる。しかし、火災を否定する強い見解もあり、明治20年代以来そのことに関する論争が約50年間続けられていた。

法隆寺内には若草寺、あるいは若草伽藍と呼ばれる一郭があり、巨大な塔心礎がみられる。そこは宝珠院の東、普門院と実相院の南で東面大垣の内側一帯であり、現在は畑地や空き地になっている。塔心礎は明治年間に法隆寺の近くに居住していた北畠男爵家に搬出された。心礎はその後、芦屋の久原邸を経て野村邸に移されたが、寺外に出されていたその塔心礎が、1939年に返還されることになった。それを機に、法隆寺は塔心礎を本来の位置に据える希望をもち、それに応えるべく発掘調査がおこなわれることになった。調査は同年12月、石田茂作・末永雅雄・澄田正一等によっておこなわれた。15日間にわたっておこなわれた調査では、トレンチの壁面での観察で土層の変化をとらえ、版築による2基の基壇の痕跡をみつけた。そして、それらが南北に配置された塔と金堂の掘込地業基壇であると考えられ、この地に西院伽藍に先行する寺が営まれたことが確認された。南北配置とはいうものの、軸線が磁北から西に約20°振れており、これは西院伽藍の造営方位とも異なるものであった。また、金堂基壇の周囲には幅12尺（曲尺）の小石敷きがめぐらされていた可能性も指摘された。それらの成果は、

石田茂作 1941 「法隆寺若草伽藍址の発掘に就て」『日本上代文化の研究』聖徳太子千三百廿年御忌奉讃記念論文集 法相宗勸学院同窓会

によって明らかにされている。この発掘調査によって明治以来長い間続けられてきた「法隆寺再建・非再建論争」に一応の終止符が打たれることとなった。（森）

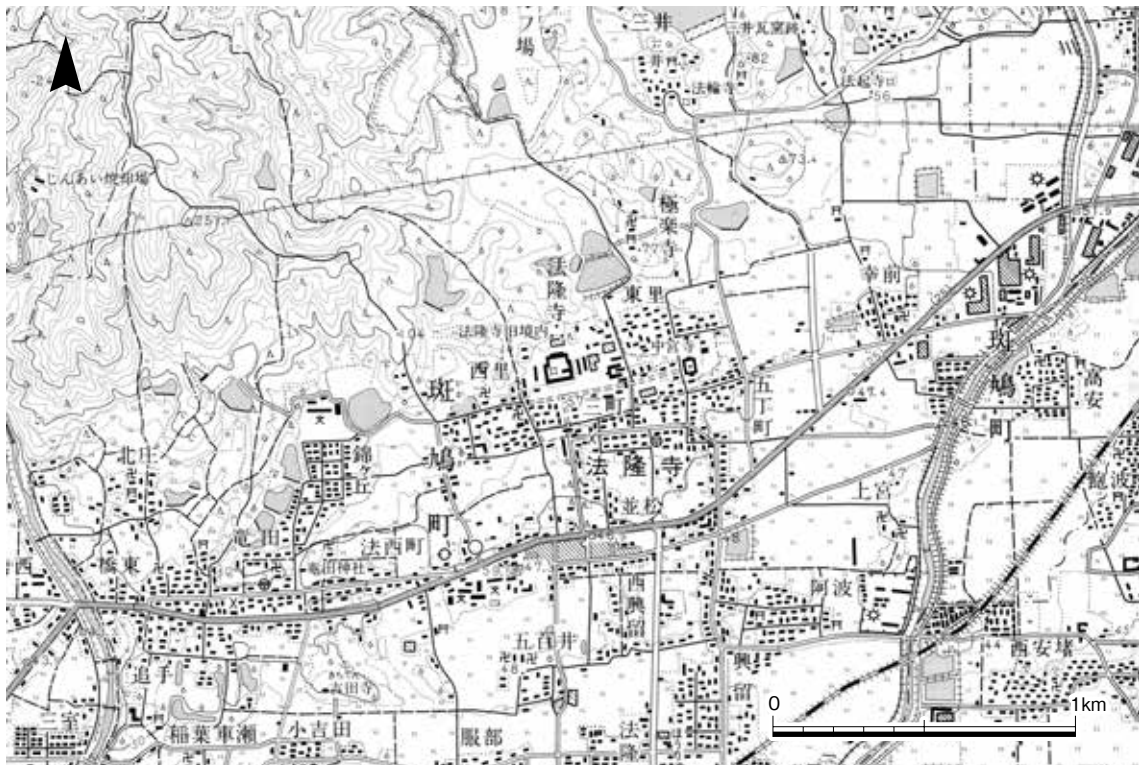


Fig. 1 法隆寺周辺の地形図（国土地理院 1：25,000 地形図『信貴山南東』部分）

2 調査の経緯と目的

1939 年に発見された若草伽藍跡の南側において、これに一部重複する重要文化財法隆寺西院南面大垣が解体修理されるのを契機に、国営発掘として再度発掘調査が実施されることになった。本修理工事に先立って、若草伽藍跡の詳細を明らかにし、修理工事に資するとともに将来の保存整備のための基礎資料を得るのを目的とした。このうちには、1939 年の調査では明らかにされなかった回廊や講堂の位置を確かめることも目的に含まれた。このために、南面大垣に沿った地域と普門院・実相院の一部についても調査対象地とした。

調査期間は 1968 年度から 2 カ年継続の予定で、実施することになっていた。2 カ年それぞれの調査期間は、機材搬入から埋め戻し完了まで含めると、第 1 次調査が 1968 年 8 月 16 日から 9 月 19 日まで、第 2 次調査が 1969 年 9 月 30 日から 11 月 25 日までであった。

なお記者発表を、第 1 次調査は 9 月 5 日、第 2 次調査は 10 月 9 日、10 月 17 日、10 月 25 日におこなった。なお第 1 次調査では、8 月 31 日にテレビ中継、同日現地説明会を実施した。また第 2 次調査では、10 月 17 日にテレビ撮影、10 月 18 日に現地説明会をおこなった。

また各調査成果は、

文化庁文化財保護部記念物課 1968 『法隆寺若草伽藍跡 昭和 43 年度発掘調査概報』

文化庁文化財保護部記念物課 1969 『法隆寺若草伽藍跡 昭和 44 年度発掘調査概報』

で、公表されている。（深澤）



Fig. 2 法隆寺境内全景図 (1 : 5,000)



Fig. 3 若草伽藍跡調査位置図 (1 : 2,500)

Tab. 1 周辺地域の発掘調査一覧

番号	調査機関	遺跡名	調査期間	報告書等
1	石田茂作・末永雅雄	若草伽藍跡	1939	石田 1941
2	石田茂作・村田治郎	法隆寺福園院	1959.11 - 1959.12	石田・村田 1959
3	国営調査	若草伽藍跡（68年度）（平城54 - 4次）	1968.8 - 1968.9	文化庁記念物課 1968
4	国営調査	若草伽藍跡（69年度）（平城62 - 5次）	1969.9 - 1969.11	文化庁記念物課 1969
5	奈文研	法隆寺境内（新宝庫建設予定地）（平城39 - 4次）	1966.1	—
6	奈文研・榎考研	法隆寺防災工事（78～83年度）	1978.12 - 1984.3	法隆寺 1985
7	奈文研	法隆寺境内（収納庫建設）（平城151 - 38次）	1983.10 - 1983.12	法隆寺発掘調査小委員会 1984
8	奈文研・榎考研	若草伽藍跡（平城225次）	1991.4 - 1991.7	奈文研 1992
9	奈文研・榎考研	法隆寺境内北方子院跡（百済観音堂）（平城226次）	1991.6 - 1992.3	奈文研 1992
10	奈文研・榎考研	法隆寺境内（喜多院東面築地）（平城226次補足）	1995.1	奈文研 1996
11	榎考研	法隆寺旧境内（福園院山門および築地）	1978.3	榎考研 1978
12	榎考研	法隆寺旧境内（律学院山門）	1978.3	榎考研 1978
13	榎考研	法隆寺旧境内（寺務所西門および築地）	1978.3	榎考研 1978
14	榎考研	若草伽藍推定地（試掘）	1986.1	榎考研 1989 a
15	榎考研	法隆寺旧境内	1986.2	榎考研 1989 b
16	榎考研	法隆寺旧境内（弥勒院庫裏）	1990.7 - 1990.8	榎考研 1992
17	榎考研	法隆寺旧境内	1995.3	榎考研 1996
18	榎考研	法隆寺旧境内（政南院跡）（旧、東茶所）	1999.6 - 1999.7 2000.3	榎考研 2000
19	榎考研	法隆寺旧境内（県 2003 - 1次）	2003.8 - 2003.9	榎考研 2004
20	榎考研	法隆寺旧境内（県 2003 - 2次）	2004.2 - 2004.5	榎考研 2005
21	斑鳩町教委	法隆寺近接地（町 93 - 1次）	1993.7	奈良県内市町村埋文報告会 1994
22	斑鳩町教委	法隆寺近接地（町 93 - 2次）	1993.8	奈良県内市町村埋文報告会 1994
23	斑鳩町教委	若草伽藍跡（町 93 - 1次）	1993.12	奈良県内市町村埋文報告会 1994
24	斑鳩町教委	法隆寺東院近接地（町 94 - 1次）	1994.6	奈良県内市町村埋文報告会 1995
25	斑鳩町教委	斑鳩宮推定地（町 94 - 2次）	1994.9	奈良県内市町村埋文報告会 1995
26	斑鳩町教委	斑鳩宮推定地（町 95 - 1次）	1995.1	奈良県内市町村埋文報告会 1996
27	斑鳩町教委	法隆寺隣接地（町 96 - 1次）	1996.1	奈良県内市町村埋文報告会 1997
28	斑鳩町教委	斑鳩宮推定地（町 97 - 1次）	1997.6	奈良県内市町村埋文報告会 1998
29	斑鳩町教委	若草伽藍跡（町 97 - 1次）	1997.1	奈良県内市町村埋文報告会 1998
30	斑鳩町教委	若草伽藍跡（町 97 - 2次）	1998.1	奈良県内市町村埋文報告会 1999
31	斑鳩町教委	法隆寺隣接地（町 98 - 1次）	1998.6	奈良県内市町村埋文報告会 1999
32	斑鳩町教委	若草伽藍跡（町 99 - 1次）	1999.9	斑鳩町教委 2002
33	斑鳩町教委	法隆寺周辺遺跡（町 00 - 1次）	2001.1	奈良県内市町村埋文報告会 2002
34	斑鳩町教委	法隆寺周辺遺跡（町 01 - 2次）	2001.4	奈良県内市町村埋文報告会 2002
35	斑鳩町教委	法隆寺周辺遺跡（町 01 - 4次）	2002.3	奈良県内市町村埋文報告会 2003
36	斑鳩町教委	法隆寺周辺遺跡（町 02 - 3次）	2002.12	奈良県内市町村埋文報告会 2003
37	斑鳩町教委	若草伽藍跡西方（法隆寺周辺遺跡）（町 04 - 1次）	2004.9 - 2005.3	斑鳩町教委 2004
38	斑鳩町教委	法隆寺周辺遺跡（町 04 - 3次）	2004.12 - 2005.3	—
39	斑鳩町教委	法隆寺周辺遺跡（町 05 - 1次）	2005.6	奈良県内市町村埋文報告会 2006
40	斑鳩町教委	法隆寺周辺遺跡（町 05 - 2次）	2005.6 - 2005.7	奈良県内市町村埋文報告会 2006
41	斑鳩町教委	法隆寺周辺遺跡（町 05 - 4次）	2005.12	奈良県内市町村埋文報告会 2006
42	斑鳩町教委	法隆寺周辺遺跡（町 05 - 5次）	2006.1 - 2006.3	—
43	斑鳩町教委	法隆寺旧境内（町 05 - 1次）	2006.2 - 2006.3	斑鳩町教委 2006
44	斑鳩町教委	法隆寺周辺遺跡（町 05 - 6次）	2006.2	—

周辺地域の発掘調査に関する文献一覧（年代順）

- 石田茂作 1941 「法隆寺若草伽藍址の発掘に就て」『日本上代文化の研究』聖徳太子千三百廿年御忌奉讃記念論文集
法相宗勸学院同窓会
- 石田茂作・村田治郎 1959 『法隆寺福園院址第2回発掘調査概報』
- 文化庁文化財保護部記念物課 1968 『法隆寺若草伽藍跡 昭和43年度発掘調査概報』
- 文化庁文化財保護部記念物課 1969 『法隆寺若草伽藍跡 昭和44年度発掘調査概報』
- 奈良県立橿原考古学研究所 1978 『奈良県遺跡調査概報 1977年度』
- 法隆寺発掘調査概報編集小委員会 1984 『法隆寺発掘調査概報Ⅲ』
- 法隆寺 1985 『法隆寺防災施設工事・発掘調査報告書』
- 奈良県立橿原考古学研究所 1989 a 『奈良県遺跡調査概報 1986年度（第2分冊）』
- 奈良県立橿原考古学研究所 1989 b 『橿原考古学研究所年報14 昭和62年度（1987）』
- 奈良県立橿原考古学研究所 1992 『橿原考古学研究所年報17 平成2年度（1990）』
- 奈良国立文化財研究所 1992 『1991年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
- 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会 1994 『平成5年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』
- 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会 1995 『平成6年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』
- 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会 1996 『平成7年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』
- 奈良県立橿原考古学研究所 1996 『橿原考古学研究所年報21 平成6年度（1994）』
- 奈良国立文化財研究所 1996 『1995年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
- 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会 1997 『平成8年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』
- 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会 1998 『平成9年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』
- 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会 1999 『平成10年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』
- 奈良県立橿原考古学研究所 2000 『奈良県遺跡調査概報 1999年度（第1分冊）』
- 斑鳩町教育委員会 2002 『斑鳩町内遺跡発掘調査概報 平成11年度』
- 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会 2002 『平成13年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』
- 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会 2003 『平成14年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』
- 斑鳩町教育委員会 2004 『若草伽藍跡西方の調査』
- 奈良県立橿原考古学研究所 2004 『奈良県遺跡調査概報 2003年度（第1分冊）』
- 奈良県立橿原考古学研究所 2005 『奈良県遺跡調査概報 2004年度（第1分冊）』
- 斑鳩町教育委員会 2006 『史跡法隆寺旧境内の調査』
- 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会 2006 『平成17年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』

3 調査組織

第1次調査と第2次調査の調査組織は、次のとおりである。所属部署名等は、当時のものである。

第1次調査

顧問	石田茂作	(文化財保護審議会委員)
発掘施行責任者	中西貞夫	(文化庁文化財保護部記念物課長)
発掘調査主任	榎本亀治郎	(元奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長)
調査員	横山浩一	(文化庁文化財保護部記念物課)
	亀井正道	(文化庁文化財保護部記念物課)
	田村晃一	(文化庁文化財保護部記念物課)
	岡田茂弘	(文化庁文化財保護部記念物課)
	松下正司	(文化庁文化財保護部記念物課)
	三輪嘉六	(文化庁文化財保護部記念物課)
	工藤圭章	(文化庁文化財保護部建造物課)
	三宅敏之	(東京国立博物館学芸部考古課)
	稲垣晋也	(奈良国立博物館学芸課)
	坪井清足	(奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長)
	佐原 真	(奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部)
	栗原和彦	(奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部)
	小島俊次	(奈良県教育委員会事務局文化財保存課)
	岡田英男	(奈良県教育委員会事務局文化財保存課)
	岡田宗治	(奈良県教育委員会事務局文化財保存課)
	資金前渡官吏	新山忠弘 (奈良国立文化財研究所庶務課長)

第2次調査

顧問	石田茂作	(文化財保護審議会委員)
発掘施行責任者	中西貞夫	(文化庁文化財保護部記念物課長)
発掘調査主任	榎本亀治郎	(元奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長)
調査員	横山浩一	(文化庁文化財保護部記念物課)
	田村晃一	(文化庁文化財保護部記念物課)
	野口義麿	(文化庁文化財保護部記念物課)
	工楽善通	(文化庁文化財保護部記念物課)
	三輪嘉六	(文化庁文化財保護部記念物課)
	工藤圭章	(文化庁文化財保護部建造物課)

稲垣晋也 (奈良国立博物館学芸課)
坪井清足 (奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長)
松下正司 (奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部)
森 郁夫 (奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部)
村上訃一 (奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部)
小島俊次 (奈良県教育委員会文化財保存課)
岡田英男 (奈良県教育委員会文化財保存課)
岡田宗治 (奈良県教育委員会文化財保存課)

資金前渡官吏 石藤守雄 (奈良国立文化財研究所庶務課長)

なおこの他に、伊東太作、猪熊兼勝、河原純之、黒崎直、佐藤興治、田中哲雄、田辺征夫、佃幹雄、宮本長二郎、山沢義貴が調査に参加した。

4 1939年調査区、1968・1969年調査区の呼称

1939年には、北溝・北北西溝・北西溝・東溝・西溝と名づけた合計5ヵ所の調査区がある。1968・1969年の調査区と区別して、各調査区名の頭に「1939」をつける。だが『日本上代文化の研究』(石田1941)所収の報告に図示された調査位置によれば、北溝・北西溝に関しては連続しないので、本報告では、「北溝1・2」「北西溝1・2・3」と分け、「1939北溝1」などと呼称することにした(Fig.4)。

次に、第1次調査・第2次調査では、調査区を拡張しながら調査をおこなった。調査時に調査区は、それぞれ「47ライントレンチ」「金堂中央トレンチ」などと称されている。調査においてトレンチの拡張時には、間に未調査部分を畦として残した。これは、土層観察のための配慮であろう。そのため調査区がこの畦で分断されてしまうことから、今回新たに調査区名を付す。そして次数の違いは、第1次なら「1-」、第2次なら「2-」と、頭にアラビア数字を付して、区別した。すなわち第1次調査の調査区を「1-1区」、第

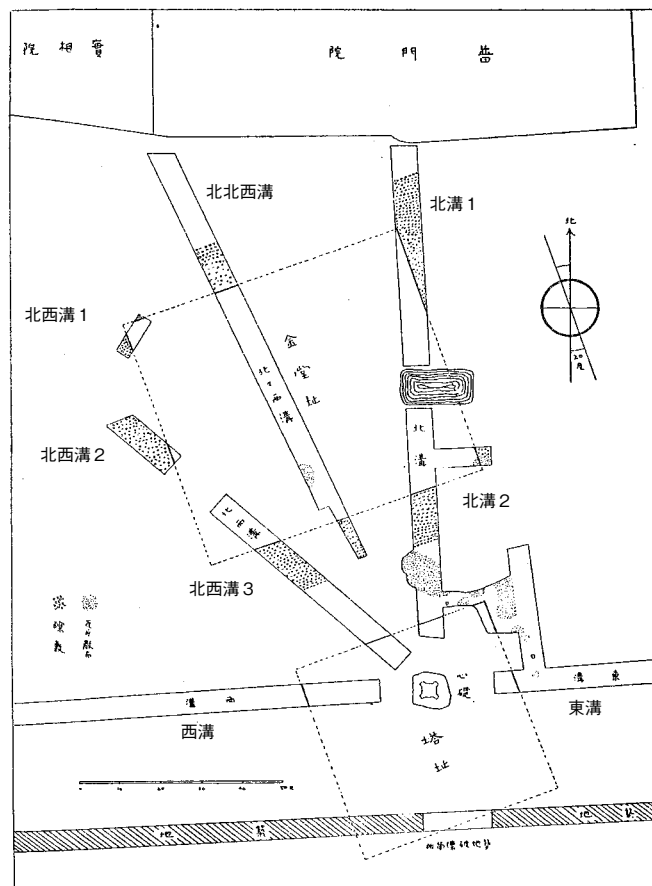


Fig. 4 1939年調査時調査区の呼称 (石田1941に加筆)

2次調査区を「2-1区」などと呼ぶ (Fig.5・6)。(深澤)

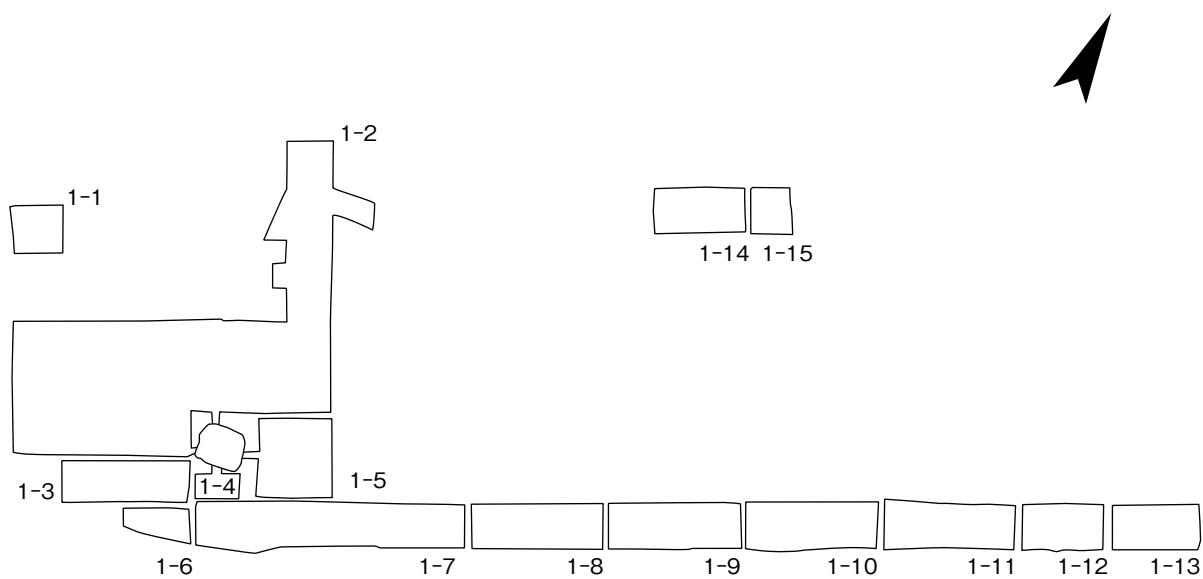


Fig. 5 第1次調査区の呼称 (1: 500)

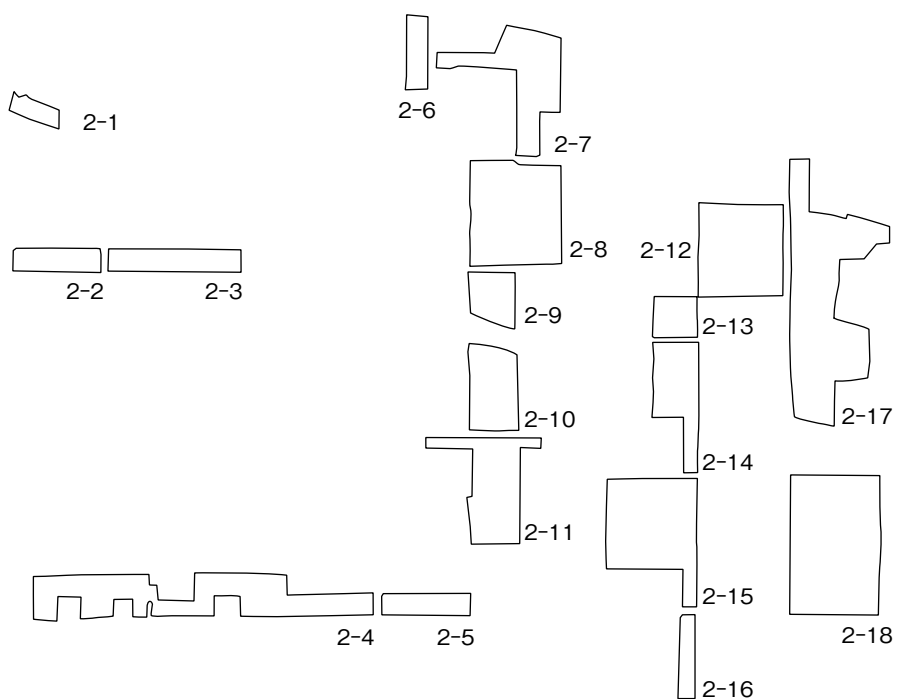


Fig. 6 第2次調査区の呼称 (1: 500)

5 測量と地区の設定

実際の基準点

調査では、発掘調査開始前に金堂跡の南東隅（石柱①）と南西隅（石柱②）にあった2本の石柱（石柱間の距離、21.746m）を基準に局地座標系を設定した。石柱①の南東角と石柱②の南西角を結ぶ線を、南北0ライン（NS：0）に設定した。東西方向は、上記の東西ラインの西延長上の任意の位置に杭を設置し、その点を東西0（E：0）とした。この杭位置は石柱②の西南角から西に、7.413mの位置にあたる。したがって、局地座標系において、石柱①東南角の座標はNS：0、E：29.159、石柱②西南角の座標はNS：0、E：7.413となる。なお、石柱①・石柱②ともに、第2次発掘調査の段階で一度取り外されて移動しており、現段階でかつての正確な座標値を改測することは不可能であった。

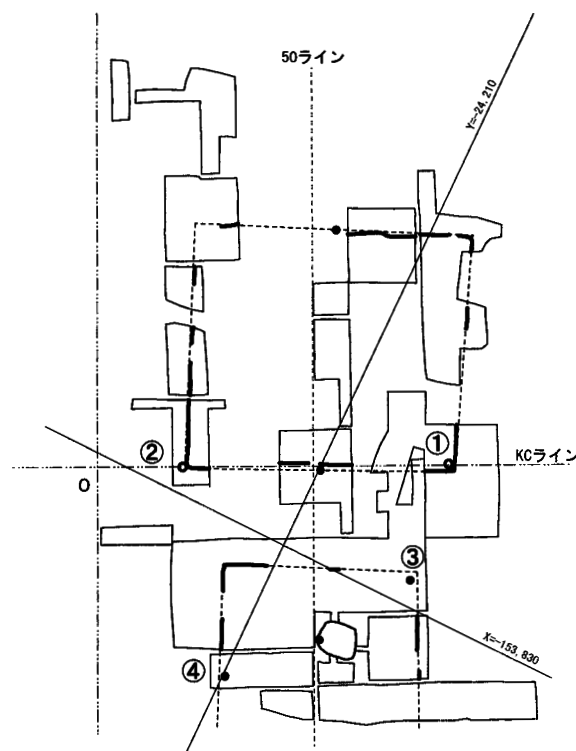
標高については、心礎を基準として実測をおこなった。

地区設定

地区設定も、石柱①・②を基準とした局地座標系上で設定した。石柱①東南角と石柱②西南角の中間地点（局地座標系：NS：0、E：18.286）をKC 50地区の南東隅として設定し、NS：0をKCライン、E：18.286を50ラインとして、3mグリッドを設置した（Fig.15）。なお、小地区はアルファベットのラインと数字ラインの南東隅交点で呼称する。

2005年度の基準点の測量

上述のように発掘遺構の実測は局地座標系を設定しておこなったが、現在使用されている座標系（世界測地系）に対応させるため、2006年1月20日に、改測をおこなった。石柱①と石柱②は移動していたが、幸い発掘調査実測野帳に、心礎北東にある石柱③と、心礎南西にある石柱④が記されており、これらは発掘前から現在まで移動した痕跡はなく、石柱③と石柱④を改測することとした。測量



	局地座標		世界測地系座標	
	NS	EW	X	Y
石柱③	S : 9.50	E : 25.90	- 153,827.88	- 24,199.44
石柱④	S : 17.08	E : 10.58	- 153,841.48	- 24,209.86

Fig. 7 石柱位置および地区設定図

は、GPSを使用し、三等三角点「小泉」（5135-76-5001）を固定局としたRTK測量をおこなった。その結果をFig.7に示した。この2点からの計算上、局地座標系は世界測地系に対して北で西に $26^{\circ}13'58''$ 振っており、地区割の基準となったKC50地区東南角の世界測地系での座標は、 $X = -153,822.756$ 、 $Y = -24,210.492$ となる。

標高についても、調査時に基準となった心礎の標高を、現行の水準点から測量をおこなった。測量は、一等水準点（1290）から直接水準測量をおこなった。その結果、礎石標高は、55.556mであった。

報告書における座標の表記

報告書では、現在使用されている世界測地系に対応するよう、報告書内の座標表記は世界測地系に統一した。

ただし、近年まで使用されていた日本測地系との対応をはかるため、全体遺構図には日本測地系の座標を併記した。日本測地系から世界測地系への変換プログラム（TKY2JGD）が国土地理院ホームページに公開されており、定点の座標変換はこのプログラムで変換可能である。しかし、面的な遺構平面図全体の座標変換を厳密におこなうのは難しい。そこで、簡便に平行移動で対応できないかを確認するため、法隆寺周辺の二等～四等三角点の新旧座標を確認した（Tab.2）。その結果、確認した三角点の新旧座標値の差のばらつきは数cmであり、本報告では便宜上、別表の平均値のように平行移動するものとみなして、旧座標を表記した。

また、標高についても、2006年の測量成果にもとづいて、実測値を世界測地系の標高に換算して表記した。（島田）

Tab.2 新旧座標値の対照

基準点コード	基準点名	等級	新座標		旧座標		差（新座標－旧座標）	
			X	Y	X	Y	X	Y
5135-76-5401	若槻	二等	-151,725.269	-18,241.467	-152,071.710	-17,980.170	346.441	-261.297
5135-76-0201	下永	三等	-155,884.994	-20,055.224	-156,231.570	-19,793.920	346.576	-261.304
5135-76-5001	小泉	三等	-151,808.881	-22,584.904	-152,155.200	-22,323.560	346.319	-261.344
5135-76-6001	千日町	三等	-150,455.680	-22,248.711	-150,802.070	-21,987.400	346.390	-261.311
5135-75-5801	松尾山	三等	-151,228.256	-25,044.793	-151,574.720	-24,783.490	346.464	-261.303
5135-65-7701	白畑	三等	-158,988.119	-25,743.490	-159,334.540	-25,482.140	346.421	-261.350
5135-75-3701	一本松	三等	-153,186.975	-25,599.898	-153,533.340	-25,338.550	346.365	-261.348
5135-75-0901	北山	三等	-156,523.249	-24,223.071	-156,869.630	-23,961.720	346.381	-261.351
5135-65-7501	白鳳台公園	四等	-158,805.249	-27,801.894	-159,151.730	-27,540.580	346.481	-261.314
5135-75-4501	栗坪	四等	-152,318.185	-27,954.133	-152,664.640	-27,692.840	346.455	-261.293
5135-75-6501	西向	四等	-150,913.818	-27,907.197	-151,260.290	-27,645.910	346.472	-261.287
5135-75-5701	白石畑	四等	-151,927.910	-25,961.734	-152,274.360	-25,700.430	346.450	-261.304
5135-65-9701	大和	四等	-157,471.183	-25,708.559	-157,817.620	-25,447.190	346.437	-261.369
5135-75-4401	片福貴	四等	-152,216.330	-29,081.669	-152,562.790	-28,820.360	346.460	-261.309
5135-65-8901	池部	四等	-157,750.295	-24,107.395	-158,096.710	-23,846.050	346.415	-261.345
5135-75-1401	信貴山東	四等	-154,904.965	-29,143.308	-155,251.430	-28,881.990	346.465	-261.318
5135-75-4601	下垣内	四等	-152,267.240	-26,926.460	-152,613.680	-26,665.160	346.440	-261.300
5135-65-8601	上牧	四等	-158,498.837	-26,811.650	-158,845.250	-26,550.250	346.413	-261.400
5135-65-8801	佐味田	四等	-158,553.415	-24,790.874	-158,899.870	-24,529.520	346.455	-261.354
5135-75-7701	石仏	四等	-150,113.767	-25,653.276	-150,460.220	-25,391.950	346.453	-261.326
5135-75-6701	槻原	四等	-150,942.437	-26,547.531	-151,288.890	-26,286.250	346.453	-261.281
5135-75-5901	三井	四等	-152,026.870	-24,045.355	-152,373.220	-23,784.010	346.350	-261.345
5135-75-4901	法輪寺	四等	-153,011.340	-23,628.041	-153,357.690	-23,366.700	346.350	-261.341
平均							346.431	-261.326
標準偏差							0.055	0.030

6 調査概要

2 ヶ年にわたる調査の概要は、以下のとおりである。

第1次調査

塔の精査と回廊の確認を目的に実施した。

すでに1939年に石田茂作らがおこなった調査において、塔と金堂の位置を掘込地業版築土で把握し、北に金堂、南に塔が並び、かつその方位が磁北に対し西へ20°振れていたことがわかっていたので、この振れに合わせるように調査区を設定した。まず現状の塔心礎の南側に幅3mで、長さ66mの東西に長い調査区や塔と金堂を結ぶ南北に長い調査区を設け、かつ心礎周辺と南端部を除く塔部分、金堂の西南隅部などを調査した。

東側の長い調査区では、これまで未発見であった回廊にかかわる遺構の検出が期待された。だが、礎石あるいは礎石据付穴、また雨落溝やその据付痕跡、さらに金堂・塔でみつかった掘込地業など回廊にかかわる遺構はまったく発見されなかった。

今回の調査は、土層に関して特に注意深く、慎重であった。

その結果、金堂、塔の掘込地業や基壇土、さらに整地土の状況把握をおこない、それぞれの築成状況、両者の築成順序、塔心礎の据え付け状況などをより明確にした。ことに塔基壇が金堂基壇の築成に遅れて作られていること、塔の掘込地業に塔心礎据付穴がみつからないので、塔心礎は地面を深く掘り込むことなく現遺構検出面より高位に据え付けていたことを明らかにした。

第2次調査

金堂の規模把握、講堂および西回廊の検出を目的に実施した。

伽藍の方位に合わせて、調査区を設定した。調査区は、金堂の規模を把握するために、西側、中央部、東側に設定した。このうち西側の調査区を北の実相院の土堀ぎりぎりにまで拡張した。また西回廊を検出するために、金堂の西側で3ヵ所の調査をした。

その結果、金堂における掘込地業の規模を明確にするとともに、基壇部分の版築土と整地土の関係を把握した。

また、第1次調査においてすでにみつかった金堂南側の斜行溝（SD 7040）が、本次調査において、金堂掘込地業の東縁外側をめぐっており、これと同規模の溝がやはり金堂掘込地業の北縁や南縁の外側でみつかった。この溝は、金堂と塔の施工順に関して、整地土の解釈を補強する。

北側の子院においても調査をおこなったが、講堂にかかわる遺構はみいだせなかった。回廊について、第1次調査では東地域に力点を置いていたが、本次調査では西地域を調査した。しかし、回廊に関する遺構はまったく発見できなかった。

なお石田が、金堂と塔の空閑地の舗装と考えた礫敷にあたるバラス土は、バラス土中やこれに覆われた古い小穴から中世の瓦器やさらに新しい土器が出土しているので、時期的に礫敷は若草伽藍に伴わないことが明らかになった。（深澤）

7 調査日誌

第1次調査

1968年8月16日～9月19日



Fig. 8 打ち合わせ風景

8. 16 (金) 横山、三輪、佐原、伊東、栗原。研修生15名。

地区杭打ち。略測（200分の1平板使用）。草刈り（平城、中田・森田）。地区杭打ちは、金堂・東南隅と西南隅の指示石柱を結んだ線をKCラインとし、それと直交するセンターラインを50ラインと定めた。平板測量責任者三輪。ガバン、カナヅチ、クギ、遺構カード100枚。県事務所から杭12（丸太）、クギ、カナヅチ借用。カナヅチと使用残しのクギは返した。



Fig. 9 調査前の若草伽藍跡

8. 17 (土) 鍬入式。雨中決行11時終る。午後、テントのはりかえ、草刈り、ベルコンのならべかえ。草刈りの結果、昭和14年12月に石田先生等の掘ったトレンチの跡と思われるものが見つかっている。トレンチの巾が1m60、両はしがひくくなる。ベルコン試運転、良好。平城からハコ2、ガバン2、本2冊、地区杭50、アメ板10、ムシロ4枚、ビニール4枚。県修理事務所、五尺の丸太（2本）、ハリガネ（番線）借用。

8. 18 (日) 石田先生、榎本先生、横山、工藤、稲垣、三輪、佐原、栗原。

朝、雨。9時より作業。塔の東側基壇をさぐりあてておく、TO 47区を中心に東側へ掘り進む。TO 47区の結果では、塔の基壇はつかめていない。TO 47区南側の壁の略図は裏面のとおりに。明日、TP 47を掘って石田先生のトレンチをさぐる。

8. 19 (月) 榎本、横山、佐原、栗原、三輪。

昭和14年、石田顧問設定のトレンチを再発掘。目的は塔の基壇線（掘込地形？）を確認することにあつたが結果としては不明である。ここでも昨日認められた灰褐色土層（瓦器含有層）が連続しているのみである。TO 48を拡張、瓦器含有層確認のため。TN 40附近までトレンチの拡張を行う。全体的にTN 40附近で黄褐色土層を切る状態の土層がありそうである。本日までのところ塔基壇が未確認であるため、いささかのアセリあり。明日より、作業員増を宮崎建設にお願いする。

8. 20 (火) 石田、榎本、横山、亀井、三輪、佐原、栗原。伽藍論攷の塔基壇の写真は昨日あけた石田トレンチ（礎石の東側トレンチ）を東側から撮影したものと判明。その断面を精査するも、写真に撮影されているような塔基壇の実態はなく、瓦器を含むかたい土（灰褐色土層）を確認したものではなかろうか。TO 48区でTO 47区のセクションの続きを追った結果、瓦器を含むかたい土はだらだらとさがって、だらだらとあがっている。

8. 21 (水) Oラインを西に拡張する。途中南北に連なる溝数条が認められるが、明確に出すのは明日以降。またOラインに地山の上がりを認める。昨日までの塔跡の状態が不明であるので新たにTR 47より北方に向けて、石田トレンチの瓦層、礫層の状態を知るためのトレンチを設定。遺物等その他特に著しい変化なし。

8. 22 (木) 榎本、亀井、三輪、佐原、栗原。

①に於いては、TO 34と35の境に地山と思われる巾9尺程のたかまりが検出され、その東では地山がさがり、その西では六条程の南北溝が検出されているが正体は不明（新しいものと思われた。掘り込んでいた土層がかなり高い）。

②褐色土を除き、石田トレンチを掘りはじめる。

③本日新たに設定、掘りはじめる。全体として、いまだに石田先生の言われる塔の基壇、回廊なるものは不明。三時より榎本・亀井・三輪、法隆寺と24日記者会見、その他の打ち合わせ。

8. 23 (金) 榎本、亀井、三輪、佐原、栗原。研修生15名。

①研修生によって南北溝の遺構の検出。染つけの陶器片等の出土があり、近世の遺構と判明。TO 35に見られる9尺巾の高まりも南北溝と地山の高さでは同じものであり、上に粘土と黒土の層が10cm程のっている。

②石田トレンチの掘上げをめざし、平城作業員で掘る。

その結果、伽藍論攷に掲載の金堂の掘込が見つかった。なお、バラス層はかなり高く、上面で平安と思われる土師器片が見つかった。

③TR 51区で瓦溜があり数点の軒瓦出土するも、瓦溜の時期は鎌倉頃にすてられたものと判明。石田西トレンチ、北トレンチ判明。

8. 24 (土) 榎本、亀井、佐原、栗原。

①東端から整理にかかる。東端では粘土層まで2尺程と深く、その上の層は瓦器を含んでいる。粘土層では小さな穴がいくつもあく。

②昨日の金堂基壇の落ち込みを西側（石田トレンチ）で出す。地業積土の状況。2cm～30cmの高さをもって残っている。

③石田トレンチの西壁によって塔基壇の西端の地業積土の状況が認められた。

④塔の北側の断面を石田トレンチでさぐるが、現在までのところ掘込は認めがたい。再度の検査の予定。

⑤②、③の結果をもとに⑤の石田トレンチを見るに、しいて認めるならば落込らしきものはある。今日まで石田トレンチの再検討を重ねてきたが、②1ヶ所では金堂は石田先生の言うとおり、塔については③、⑤の所で、苦しいが認められないことはない。しかし④では、まだなんとも言えないというのが今日までの結果である。

8. 25 (日) 榎本、亀井、田村、稲垣、佐原、栗原。

①東トレンチ、東大垣にむけて5コマ延長。そのうちTO 32～TO 31の2区を掘りさげはじめる。TO 33～TO 34の2区は、黄色面までさげて清掃。黄色土面は西側に行くにつれて高くなる。小穴バラバラ瓦、瓦器片をその中より検出。

②石田トレンチの清掃。KC 46の石田トレンチ掘りおわりKC 46区南壁にて金堂の基壇掘込（石田先生の言う）を検出。

③トレンチの清掃中。

④本日より掘りはじめる。

8. 26 (月) 日誌なし

8. 27 (火) 榎本、三宅、田村、佐原、栗原。

雨中決行。表土のみ平城作業員5。宮崎（女2）でやる。遺物整理ボチボチ。

8. 28 (水) 佐原、栗原、三宅、稲垣、田村、松下。

雨天のため一時中止。10時より研究所作業員5名。排水。午後、宮崎建設8名（男3、女5）加わる。排水及び表土はぎ。遺構カード整理。

8. 29 (木) 佐原、栗原、三宅、田村、稲垣、松下。午前中作業。雨のため殆ど仕事はできない。午後作業中止。新聞発表資料等整理。

8. 30 (金) 榎本、工藤、三宅、稲垣、田村、佐原、栗原。雨水の排除に午前中かかる。午前10時頃、石田先生の推定された塔の西北隅の石柱より約1m北に建物の基壇の西北隅を検出。西は推定線上にのる。TP 47区で東端も検出できた。その結果16mの長さが東西でとれた。

TR 49、TO 49、TP 50の遺構については、明日をまつ。

8. 31 (土) 榎本、石田、三宅、工藤、田村、松下、和田、稲垣、佐原、栗原。

朝7:30より、NHKスタジオ102の為6:30出勤。昼2時より見学会。①心礎の据えつけのあとを探るも褐色土層あつく地山面まではおろせない（地表下30cm）。②版築の行われている範囲と石田トレンチでの落込みの再検討。石田先生の時の方位とは異なる。③TO 35区で炭化物を含んだ層がTO 49区の褐色土にもぐるクボミであることを発見。同層より多量の丸平瓦（ナワ目は1点もないか）と模様瓦3点、土器少々、フイゴの口等を発見。

9. 1 (日) 石田、榎本、工藤、稲垣、栗原、松下。作業員8名。

平城作業員休み。作業員が少ないため塔周辺に集中。TO 35の昨日出土土坑（灰・フイゴ等）を清掃。塔心礎周辺の据えつけ痕跡及び抜き跡を検索。TQ 50に広い土坑あり、地山を掘りこんでいる。中心に向かって斜めに下がっているため、心礎の据えつけてあったところか？TP 50の中心にむかっての下りも同様のものと思われる。TQ 47の瓦堆積を半分取り除く。塔東南の基壇縁確認。新しくTO 50、51を掘り始める。明日の作業、塔周辺の整理。東トレンチの清掃。塔心礎東のバラスを取り除く。TO 50、51を掘り下げる。



Fig. 10 塔心礎周辺の調査状況

9. 2 (月) 榎本、稲垣、岡田、佐原、松下、栗原。作業員（平城5、男3、女7）。

①今回の発掘方針のとおり、金堂の基壇南西の隅をつかみ、伽藍のセンターラインをきめて、方位をつかむための①をあける。明日以後に結果はまつ。

②昨日、心礎の据え方をさぐるも、意外に塔中心部の落込みは新しいものばかりで地山が高いことを発見したが、本日は②により対照的なその場所をもとめるも時間切れなり。

③東端の5区に力を集中し、地山面までの遺構を二枚はぐ。明日をもって終了させるつもり。やり方のくい、貫板発注す。東トレンチは、もうひといきで終了。

9. 3 (火) 榎本、岡田、佐原、松下、栗原、坪井、佃。作業員（平城5、男3、女9）。

①金堂跡西南隅の確認作業をつづけ、掘込地業を認めた。粘土質地山土を切って褐色砂質土で地業されている。なお、西南隅は石田博士推定の西南隅標石直下である。

9.4 (水) 榎本、岡田、稲垣、佐原、松下、栗原。作業員（平城5、男3、女3）

①発掘地区内の排水作業。②塔東北隅の溝および地山面露出作業。③東トレンチのTO35に東で地山の砂層面検出。④写真撮影。⑤5日午後1時半より新聞発表することについて、寺の了承をとる。

9.5 (木) 榎本、佐原、栗原、稲垣、伊東、岡田、松下。午前中、写真撮影。午後、新聞発表。実測、やり方打ち、水糸配り。

9.6 (金) 榎本、佐原、栗原、稲垣、岡田、松下、伊東、河原、山沢、佃。

水糸配り。実測開始。夕刻、写真撮影(セクション)チェック、夜打ちあげ、岡田氏の開会演説あり。猪熊参加。金堂南縁付近、状況は遺構カードを見よ。バラス層中、瓦・土器片少量、年代不明。黄褐色整地土層中、瓦・土器、同層上面よりピットあく。瓦ののる茶褐色土は、南にいくにしたがって、うすくなって、瓦は地山に直接のる。瓦破碎、火中？したものあり。塔北縁の整地土をとったが、地山面から穴2つ。瓦あり。



Fig. 11 塔心礎周辺の調査風景

9.7 (土) 榎本、稲垣、岡田、松下、栗原、河原、山沢、佃、佐原。

実測。斜溝の軒丸瓦下から手彫り杏葉紋軒平瓦。火中するものらしく問題なり。

9.8 (日) 岡田、松下、栗原、佐原。

実測。浅野先生、奥様、令息、横山氏。

9.9 (月) 栗原。

9.10 (火) 栗原、佐原。

器材、平城返却。杭抜き。本日現在宮崎の埋め戻し始まっておらず。12日からやる由。鈴木嘉吉氏連絡。瓦等員数、記念物課に報告。

(日誌の記載は以上)

第2次調査

1969年9月30日～11月25日

9.30 (火) 横山、石藤、松下、森。

器材運搬。午前、午後各1回、草刈り。保存事務所にて事務事項の打合せを行う。森

10.1 (水) 横山、稲垣、松下、宮本、森。

地区設定。昨年同様（金堂標柱を利用）。草刈り。森

10.2 (木) 榎本、横山、稲垣、松下、森。

午前中、KH53～KJ53にトレンチを設定し、金堂跡の北西隅を追求。石田博士のトレンチを確認するとともに、「石敷」を追求する。「石敷」はさほど明瞭ではない。午後はトレンチをKE53まで延長する。森

10.3 (金) J-Line以南では「バラス下」の黄褐色土面を検出。KE53では穴を4個検出したが、「南」の穴からは13C以降の瓦器片が出土している。KF53の石田Trの南壁面で金堂基壇の掘込地業と思われる落ち込みを認めたが、他地区で同様の状況を確認した後に平面発掘を行うことにする。なお、本地区及びKG53では、石田博士の「石敷」は検出できなかった。推定金堂北西隅以北の「石敷」を一部取り除いたが、バラス下層の黄褐色土から瓦片を数点発見した。森

10.4 (土) 榎本、横山、松下、森。(夕刻、野口氏)。KF53の石田Trの壁面に昨日表われた落ち込みは東壁面でも同様の状況を見つけたが、他地区では明瞭ではない。この落ち込み状のところに入っている土は、砂を混えた黄褐色土であるが、KH53においては非常に薄く、その厚さは2cm未満である。しかもKF53で出た位置よりも西へかなり張り出していく。KF53と同様の状況を求めるため、KI52で石田トレンチを追求することにする。KK52以北の拡張区は、かなり後世の攪乱が行われている。「石敷」バラスはKK52に若干認められる。金堂基壇南西隅にかけて、南部を拡張する。昨年のトレンチを再発掘し、南西隅を検出する。基壇の積土は、KF53壁面に見える土と同質のものである。森

10.5 (日) 榎本、野口、松下。⑬

金堂の西南隅の検出を北に拡げる。金堂基壇と埋土の区別は北にゆくにしたがって不明確である。

金堂北西隅を検出した石田トレンチを完掘する。平面でつかめない。金堂基壇は、石田トレンチの南壁で版築状の基壇土が確認できた。バラスはその北端より約10m北に続いている。北西隅は石田トレンチの北壁にはみられない。KJ52区拡張。KL～M52地区ではMの端までバラスがみられ、それ以北はない。掘り下げるが遺構は明瞭でない。KE地区に小穴多数検出。西部地区の草刈りを行なう。

10.6 (月) 榎本、野口、松下、森。

KA58～63に東西トレンチ設定。表土直下の黄褐色土には、細石がかなり混入しており固い。この層の範囲は

まだ明確ではないが、ほぼA-Lineに沿ってその南限を示すかも知れない。KL以北では黄褐色の面を検出したが、東北隅は、若干固く地山風である。他はきわめて軟質であり上層には、瓦片を含んでいる。森

10.7 (火) 榎本、野口、松下、森。

58Line以西のトレンチで、石田トレンチを検出する。石田トレンチの壁面の所見によれば、表土直下は、花崗岩細片を多量に含んだ土で、その下層は青色砂質粘土である。この何れの層も地山と考えられる。金堂跡東辺に南北トレンチを設定する。森

10.8 (水) 榎本、野口、稲垣、松下、森、(坪井)。

金堂跡東辺トレンチでは、「石敷」面検出後、B-Line以北を掘り下げる。金堂跡西南隅では、推定位置にほぼ直角にCornerを検出した。昨年度の鈍角のCornerは、整地土の相異による見誤りであろう。西南方の東西トレンチでは、中世の遺物を含む南北溝を検出した。9日の新聞発表の内容については別紙のとおり。森

10.9 (木) 榎本、野口、稲垣、松下、工楽、森。

金堂跡西南隅の層位を全員で検討。暗灰色土から掘り込み地業を行なっているが、この土は地山ではない。層位の状況は左図の如し。但し、②層のバラス土については他との関連によって再検討を行う。③、④には遺物を若干含んでいる。⑥は地山である。⑤は細砂を含んだ濃黄褐色土が主要成分であり、若干版築を行なっている。西方トレンチでは、60～61にかけて黄色粘土の堆積が認められる。金堂跡北東に南北トレンチ設定。表土排除。森。新聞発表。

10.10 (金) 祝日の為作業休み。

10.11 (土) 榎本、松下、工楽、森。

金堂跡東南トレンチのバラス面は、左図のように、金堂の東縁以東では認められない。KC45においては、瓦の堆積が見られ、瓦溜と思われるが、輪郭は明瞭でない。金堂跡東北隅のトレンチでは、北方に黄褐色土が認められる。金堂跡北西のトレンチでは、東西石列を検出したが、中世以降のものである(江戸の燈明皿検出)。なお、実相院の南面築地の方向と一致している。西南トレンチは東方へ拡張。

10.12 (日) 榎本、松下、工楽、森。

金堂跡東南トレンチでバラスを除去し、黄褐色土面を検出。KB45でバラスの下から中世の燈明皿を検出した。又、KC45の小穴には、焼土、木炭が見られた。KF45～KG46にかけて、石田博士のトレンチ以外のトレンチの痕跡を検出し、断面に金堂土壇の積土の状況が明瞭に現れたが、石田トレンチが重複しているために、掘込地業の状況は不明。なお、石田トレンチは地山面まで掘り込まれている。金堂跡北西トレンチで、金堂北側の黄褐色土を追求するために東西トレンチを設定。KM54で南北方向の石積を4段検出、溝の西岸と考えられ、溝底から近世の陶器片が出土する。この埋土は、東側の黄褐色土の下に入ることが判明。金堂跡西南の東西トレンチを東



Fig. 12 金堂北部の調査風景

へ(KA54まで)拡張した。表土直下の暗褐色土から多量の中世の土器が出土した。森

10.13 (月) 石田茂作、榎本、松下、森、工楽。

中西課長、午後2時半来訪、読売テレビ打合わせ。金堂東面のトレンチでは、基壇土らしきものの東への続き具合をみるため東へ。井戸西半部にて、下層よりアスカ瓦出土のため、東半を掘り広げ、穴の全形を出す。それより下へ掘り下げ始め、深さ1.5mのところより曲物の井戸枠が出てくる。

10.14 (火) 石田、榎本、松下、工楽、森。

KA45・46のバラス土を除去。黄褐色土面に多数の小穴を検出。バラス土中及び穴から出土する土器は、平安後期～鎌倉初期のものが多く見られる。金堂跡東面G-Lineに検出した基壇築成土の張り出しは、想定東縁から約15m東へ張り出し、約60cmを隔てて再び東への張り出しが認められる。金堂跡西方トレンチでは暗褐色土が地山の直上まで堆積しており、地山面には方位が一定でない3条の溝が穿たれている。森

10.15 (水) 石田、榎本、松下、工楽、森。

KM63に東西トレンチ設定。西方トレンチ内の小穴(KH62)から土師器の坏2点出土。この小穴は灰白色碎石混り土を切って穿っている。なお、この碎石混じりの土は、西方に設定した2本の東西トレンチ及び金堂跡北西方で検出し、その状況(明瞭な黄灰色地山の上に堆積しており、人為的な積み土とは考えられない)から、「自然堆積土」として結論づけた。金堂跡東南隅は平面的には極めて見分け難い。土層の状況は左図の如し。金堂跡北東隅では、バラス土が全面に見られ、バラスを排除すると黄褐色土面になり、中世の土器を埋め込んだ小穴が検出される。土層の状況を検討。結果は左図の如し。森

10.16 (木) 榎本、工藤、松下、工楽、森。(石田、浅野、大岡)

金堂跡東南隅はプランでは見分け難い為、地山面(掘込面)まで掘り下げる。斜溝の輪郭はきわめて明瞭である。金堂跡南面は、バラスを除去。金堂跡東北隅は石田トレンチの西壁面では、検出できないため南へ拡張。実相院境内に2カ所トレンチを設定。講堂土壇の積土を追究したが、地山の上には約85cmの中世以降の積土が存在

するのみである。地山面のレベルは、金堂跡東南隅の地山面より20cm低い。

10. 17 (金) 榎本、工藤、松下、工楽、森。

金堂跡東北のコーナーを確認した。掘り込み地業は、他と比べると浅く行われている(約15cm)。掘込み上面の黄褐土は、1層ではなく左図のようにも見受けられるため、西方へ拡張して後日検討する。金堂東南隅の南北溝は金堂跡土壇南縁に沿って枝分かれする。但し、西南隅では検出できなかった。実相院北庭のトレンチの状況は左図の如し。森。新聞発表。読売テレビ撮影。実相院境内南トレンチは普門院西築地から4.5m西、実相院建物際。

10. 18 (土) 榎本、工藤、松下、工楽、森。

金堂中央トレンチは、基壇面(地山面)まで排土。金堂南縁に一部凝灰岩の細片を検出。金堂跡東南隅では、三又溝内の瓦を露出する。金堂跡東北隅地域のトレンチを西方に拡張。黄褐土まで排土。森。

現地報告会。



Fig. 13 現地説明会

10. 19 (日) 工藤、田村、松下、森。(高井)

10. 20 (月) 榎本、田村、松下、石井、伊東、森。(黒枝) 遣方設定。水糸配り。基準線のみで、雨にて中止。

10. 21 (火) 田村、松下、石井、田中、森。

北東部では、斜溝の延長部を検出。金堂の周囲をとりまくものであるか。土壇中央に3×5mの南北トレンチを設定。水糸配り終了。森。実相院境内2カ所埋め戻し。

10. 22 (水) 田村、稲垣、松下、三輪、森。

北東トレンチの東西溝検出後写真撮影。KI 47の穴には瓦が詰まっている。中心トレンチは基壇積土面まで掘り下げを行う。東西溝を検出。これは西で検出した室町の溝の延長部である。中央トレンチ、実測後地山を掘り下げる。プラン実測開始。

10. 23 (木) 三輪、森、松下。

プラン実測。

10. 24 (金) 榎本、三輪、森、松下、佐原。

プラン実測。

10. 25 (土) 榎本、横山、稲垣、森、松下。午後、坪井、石藤。

雨の為作業中止。現地にて検討会。午後2時より新聞発表(最終会)。



Fig. 14 SD 7040 と多量に出土した瓦

10. 26 (日) 横山、稲垣、森、松下。午後、田辺。

プラン実測終了。レベル読み。各壁のセクション検討。金堂東南端の斜行溝、掘り下げる。

軒瓦は総て手彫りの杏葉文である。金堂中央トレンチを掘り下げる。

10. 27 (月) 榎本、横山、佐原、森、松下、河原。午後、坪井。

中央トレンチ他要所のセクション検討。基壇土が掘込地業外にはみ出、その上にのった整地層をきって、塔が作られていることを確認する。時々雨及び少人数であるため、検討に時間がかかり、実測進まず。中央トレンチをほぼ全域掘り下げる。KG 49は近世の土坑で破壊されている。底より寛永通宝出土。各壁のセクション用の削りを行なう。

10. 28 (火) 榎本、横山、佐原、森、猪熊、黒崎、松下、佐藤(午後)。

セクション実測。法隆寺テント、椅子(15)返却。

10. 29 (水) 佐原、猪熊、松下、黒崎、森。

東南斜溝、中心部写真撮影。土層状況撮影。土層検討。土層図作製。塔跡基壇中の穴の底には、花崗岩片が数個あり、穴自体は版築状に埋め戻している。

10. 30 (木) 榎本、佐原、松下、黒崎、森、(坪井)。実測、土層図。塔の土壇に掘り込んだ穴について、全員で検討。性格については不明と言わざるを得ないので、掘り広げるべきという意見もあったが、調査期日もすでに数日延びているため、現状での実測、写真撮影に止める。

10. 31 (金) 松下。

全景撮影。器材撤収。第2次調査終了。

11. 4 埋め戻し立合いの為、遺物点検。

11. 8 埋め戻し立合い。第1次瓦箱入替え。

11. 12 埋め戻し立合い。

(日誌の記載は以上)